

Hospital Foch 留学報告

脳神経外科 鶴田和太郎

2015 年元旦から2ヶ月間、大学病院の若手医師派遣制度を利用して、フランスの Foch 病院に短期留学させて頂きました。松村教授、山本診療グループ長を始め脳外科スタッフの皆様、また、お世話になった国際連携室の皆様に感謝申し上げます。

今回留学させて頂いたのはフランスの Foch 病院の神経放射線科でした。部長の Georges Rodesch 先生は、脳血管内治療の世界で非常に御高名であり、特に AV shunt 疾患治療の第一人者です。日本にも何度も講演にいらっしゃっており、日本の脳血管内治療医に血管解剖の詳細な知識を与えてくださいました。私の師匠である虎の門病院脳神経血管内治療科部長の松丸先生と Rodesch 先生は故 Pierre Lasjaunias 先生に師事した兄弟弟子で、現在も交流を持たれています。私が初めて Rodesch 先生の講演を聞かせて頂いたのは2011年の春、東北東日本大震災後間もなくの頃、タイのチェンマイで行われた PLANET course という血管解剖のセミナーに参加した時のことです。ダンディな雰囲気と分かり易いレクチャーに感銘を受けたのを覚えています。その時から Rodesch 先生の脳・脊髄の血管奇形に対する血管解剖を熟知した治療戦略の立て方と NBCA の卓越したテクニックを間近で見て勉強したいと考えていましたので、今回のチャンスに松丸先生にお願いして連絡を取って頂き、先方に受け入れて頂けることになりました。

フランスといえば芸術、ファッション、エッフェル塔、フランス料理とワインくらいの漠然としたイメージでした。フランス生活を経験できるのも最初で最後だろうと考え、思い切って娘の幼稚園を休ませ、家族3人で渡仏しました。日本のお正月気分はお預けのまま元旦から長時間のフライトでフランスに着くと、街は閑散としたムード。クリスマスは盛大にお祝いするようですが、新年のお祝いはあっさりしたものようです。アパートの蛇口から水が出ず(なぜか熱湯は出る)、到着そろそろドタバタはありましたが、何とかアパートでの生活を軌道に乗せ病院に通い始めました。そして数日たった、1月7日シャルリエブド社銃撃事件が起こりました。その日はパリ市内の Rothschild 病院に出張塞栓術の同行をしていましたが、すぐ近くで事件はおこりました。犯人が乗り捨

てた車は、まさに病院から徒歩数分のところで発見されていました。フランス語が分からない私は夕方自宅に戻ってヤフーニュースをチェックして初めて知ったという始末です。それからしばらくは、街やメトロの駅には機関銃を肩にかけた物々しい軍人が多く目につき、緊張感がただよっていました。私も娘がいたので、必要以上には出歩かず、追悼集会はテレビで見っていました。事件翌日病院では、昼食が終わっても30分以上誰も席を立たず、テロについての議論が続きました。フランス人は本当に熱く議論します。現在のフランスは移民政策により、アフリカ系、アジア系、イスラム系などの人々が共存する多民族国家となっていること、また歴史的に隣国との戦争を繰り返してきたことなどを見聞きすると、フランス人の気質や社会が少し理解できます。我々島国で生きてきた日本人との違いについて考えさせられるところがあります。

さて、Foch 病院はパリ郊外シュレンヌにある病院で、パリ市内からバスで行くとブローニュの森を抜けて凱旋門賞が行われるロンシャン競馬場の横を通り、セヌ川を渡った先の小高い丘の中腹にあります。神経放射線学以外にも心臓血管外科や婦人科が有名で日本からも留学生が来るそうです。Foch 病院の神経放射線科のスタッフは3名で Rodesch 先生の外、Coskun 先生、Guedin 先生がいて、その他、レジデントが2名という構成です。研修は、症例見学というかたちでしたが、Rodesch 先生の後ろに背後霊のように立って、細かな NBCA の注入テクニックやカテーテル操作を間近にみることができました。Rodesch 先生の治療はほぼ全例 shunt 疾患で、Foch 病院では大人の頭蓋内外・脊髄の AVM, AVF を治療し、小児例のガレン大静脈瘤等の shunt 疾患については、パリ市内の Rothschild 病院に出張して行きます。ほぼ全症例の解説をその日のレポート作成時にして頂き、私の拙い英語を一生懸命理解してくださり、一つ一つの疑問に真剣に答えてくださいました。Rodesch 先生は親日家であり、血管造影室入り口の壁紙が一面は銀閣寺、もう一面は龍安寺の写真になっています。ご本人曰く一番のお気に入りはお東福寺だそうです。自ら私の面倒をみてくださり、毎日朝会うと、「Everything OK, Wataro?」と声をかけてくれ、昼食も極力一緒にとってくださいました。

驚きなのは、Rodesch 先生も自分の担当患者では診断血管撮影を行っているということ。レジデントに穿刺の仕方を指導しながら進めて行きます。また、放射線専属ナースがいて、日本での放射線技師と看護師の仕事を両方こなしており、これも驚きでした。彼らは血管撮影装置や画像作成に精通しており、さら

に看護師として薬品準備や患者さんのケアも行います。さらには、レジデントが少ないこともあると思いますが、手洗いして医師と一緒に治療や検査に入り、時にはNBCA注入時のカテーテル抜去役(これは結構大事な役です)をこなしています。日本では、放射線技師や看護師がカテーテルを操作することはありません。フランスでは医師の指導、責任下ではこれらの行為は許されているということで、彼らのモチベーションや治療理解の向上につながるので重要なことだと話されていました。

言葉に関しては、基本的に血管造影室内の会話はフランス語です。治療の流れや使用する器材は大体わかるので、タイミング良く必要な器材を出したりして積極的に治療チームの輪に加わっていきませんが、細かい話や雑談はわかりません。ドクターとは英語ですが、コメディカルとのコミュニケーションにはフランス語は必要だと思いました。行き帰りのバスや夜アパートに帰ってからフランス語の教科書を読みましたが、2ヶ月の付け焼き刃ではやっぱりどうにもなりませんでした。フランス語がはなせればもっと打ち解けられるのだろうになあと思うことはよくありました。

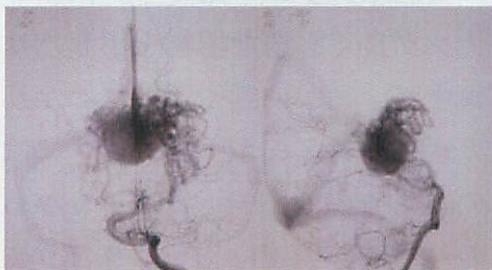
FochとRothschildを合わせると、留学期間中経験できた症例は全部で55例、うちAV shunt疾患が約半数29例を占め、AV shuntを学びたかった私にとって非常に満足な内容でした。1例紹介しますが、この症例は6ヶ月の男児、パリーノー徴候で発症したchoroidal typeのガレン大静脈瘤です(図参照)。Rodesch先生はMagicというflowguideのmicrocatheterを使用してfistulous point直前までcatheterを到達させます。非常にhigh flowなshuntですが、高濃度のNBCAを一気に打ち込んで塞栓します。feederから瘤内に広がるNBCA castがマッシュルーム状になるのが理想だと何度もおっしゃっていました。急性期血行再建や動脈瘤の塞栓術もみましたが、これらは日本での治療レベルが決して負けていないと実感できました。また、High resolution Cone-beam CTの撮影や画像作成については、私が質問される方で、彼らに少しでも貢献できたことがあったのではと、嬉しく思いました。これらの分野では、日本からの治療成績や画像撮影技術をどんどん海外に発信していくべきであると認識しました。

週末はフリーでしたので、家族と過ごすことができ、パリ市内の美術館巡りや海に浮かぶ修道院モンサンミッシェルなど観光ができました。また、1月19-23日の期間はフランスのスキーリゾート、バルディゼールで血管内のセミナーがありRodesch先生と共に参加しました。松丸先生はじめ日本の先生方と会え、

楽しい時間を過ごすことができました。

2ヶ月間、病院スタッフの方からも親切にして頂いて、有意義な研修期間を過ごすことができました。今は無事に帰って来れ、ほっとしております。早く日本時間に体を戻して、フランスで得たものを診療に還元したいと思っております。ありがとうございました。

Pre-embolization Lt. VAG



Embolization from PCA feeder



Post-embolization Lt.VAG

